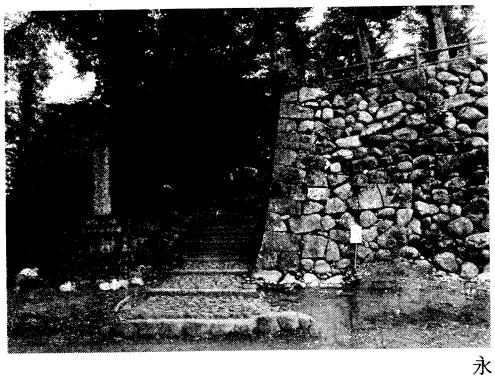
改めた。そして寛永十六年（一六三九）日田の地は島原の乱を受け代官支配地となり、二人代官（小川藤左衛門・九左衛門）が着任、永山城前に布政所を設置した。これにより永山城はその使命を終えたが、ここでは廃城後も、代官によりさまざまな措置が取られている。寛政五年（一七九三）の伏見稲荷大明神の勧請、文化十五年（一八一八）の、代官塩谷大四郎による金比羅祠建立などである。この工事の際、古墳時代の横穴墓から人骨が出土したため、帰安碑を建てて供養した。その碑文が若き淡窓によるのは周知のとおりである。これらの工事は、他ならぬ布政所が、諸々の大義の下で城山の整備補修を行ったことを示している。

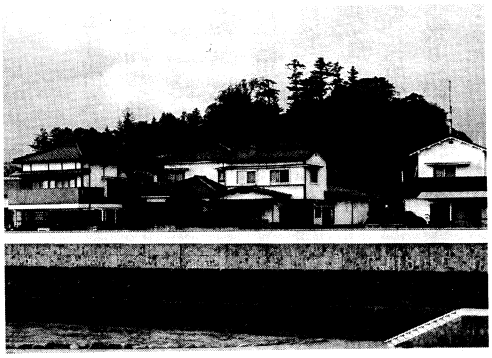
塩谷は、この「永山」でしばしば廣瀬家と咸宜園の淡窓師弟を饗応している。

・文政八年（一八二五）

（二月）二十八日。塩谷明府ヨリ先考ヲ招イテ城山ニ於テ宴ヲ賜ハル。予夫妻、久兵衛、伸平、弥六、謙吉、伊織カ妻、久兵衛カ二女、伊織カ一子一女、皆随ツテ行ケリ。此時、山田恕平、藤屋七兵衛モ亦家族ヲ携ヘテ来会ス。府君自ラ其ノ座ニ臨ミ、宴終リテ後命シテ府内ヲ観セシメ玉ヘリ。

ここでは永山城について淡窓は「城山」と呼んでいる。この城山で塩谷は廣瀬一族ほかを饗応したというのである。さらに、





永山城

・天保二年（一八三一）

八月朔。謙吉ト官府ニ至リ、当日ノ賀ヲ申サントス。時刻尚早シ。諫山安民、相良元達ヲ伴ヒ、永山ニ登リ、暫ク逍遥シテ帰リシニ、礼謁ノコト已ニ終リタル後ナリ。期ニ後レタル罪ヲ謝シテ、家ニ屏居セント請ヒシカトモ、夫レニ及ハサルヨシ沙汰アリ。予、弱令ヨリ府中ニ出入リスリコト数十年、未タ曾テ此ノ如キ怠慢ノ行ヲナサス。コレ老イテ耄スルノ徴カ。戒メズンバアルヘカラズ。

・九月十一日。明府ヨリ塾生四十余人ヲ招イテ永山ニ於テ、角抵（相撲）ノ戯ヲ観セシム。畢リテ後、服部権六、増田良作ノ二子ニ命シテ、其ノ家ニ於テ之ヲ饗セシメ玉ヘリ。

右の八月の記事では、淡窓は謙吉とともに官府に賀を申しに出向いたが、到着が早かったので、諫山安民らと「永山」を逍遥し、官府にもどったが礼謁の儀はすでに済んでいた。ここでは「永山」が「逍遥」の場とし開放されていたことが示唆されている。

淡窓は永山古城について、これを「城山」「永山」などといい永山（古）城とは呼んでいない。しかしそれはそれとして、永山城が、いわゆる廃墟の荒城となることはなく、相応に行き届いた手入れがなされていたことがうかがえる。この管理は、先の永山城の沿革の示すところ、布政所によってなされていたことは明らかである。

石松観音堂（図1・15、16）

花月川の支流有田川に沿う石松の地に石松観音がある。この観音堂は森春樹の『亀山鈔』廃寺の項に「石松村に松林寺ありし。その観世音菩薩の木像、其験ある由にて近年二世秋風庵桃秋翁、室を建てしなり」とあるように廣瀬家にゆかり深いお堂であった。すなわち「日記」に、

・文政二年（一八一九）

四月八日　是日。石松邑観音堂成。遷　霊像焉。陪伯父往観。謙吉。屯。三七郎。惣平。一乗。潤八。元吉。常吉。和市。常太郎・慶三郎。